清澤悟「今の建築に生きる柳宗悦と民藝の思想」

清澤悟前会長には、「今の建築に生きる柳宗悦と民藝の思想」のテーマでお話しいただいた。前半は建築様式の時代的な変化について、豊富な画像を手掛かりに説明された。日本の明治維新前後と重なるのが重厚な新古典様式。続くモダン様式ではピロティと屋上庭園により地上の空間が通行人に開放されたり、“less is more”を掲げた国際様式が、日本人の弟子を通して国内に持ち込まれた。ポストモダンは“less is bore”と称し、それまでの流れに逆行していった。さらに脱構築へと進むと、建築は自由に何でもできるようになる。建築家なしの建築を掲げ、ヴァナキュアーな風土に寄り添おうとしたルドルスキーは、後半のテーマである民藝運動と呼応する考え方を先行して示していた。民藝運動を始めた柳宋悦は、鑑賞するものとしての芸術と使うものとしての工芸を対置し、工業化の中で失われようとしていた工芸を守ろうとした。棟方志功は浄土真宗の信仰が篤い富山の南栃地方に疎開し、宗教と一体化した土徳としての民藝に触れ、小さな自分の自力の世界での創作から、他力の世界での創作へと変容している。目に見える建築の向こう側にある建築家の心が、お話しを通して描き出された。

続く討論では、真善美の中での美の位置づけについての意見の交換や、土徳に触れた棟方の変化から、徳は人を成長させうるものではないかという指摘、実用としての民藝も著名な作家のものは芸術作品に負けず高価であったり、斬新すぎて実際の使用には不適であるなどの矛盾、さらには地震国日本でのピロティの工学的な安全性など、多様な側面からテーマを論じることができた。（文責：大津留）